

熊本SJCD例会抄録(2018.3.27)

i. 表題

抜歯を行う前に保存治療を試みることの重要性

ii. 発表者氏名 所属機関

陶山 新吾 陶山歯科クリニック

iii. 略歴

2004年 福岡歯科大学歯学部卒業

2007年 川崎歯科医院勤務

2013年 陶山歯科医院事業継承

iv. 所属団体

日本臨床歯科医学会 熊本支部

v. 抄録本文

近年欠損補綴の選択肢としてインプラント治療の予知性が高いことは周知となっている。その影響か予知性が低いと診断されると、従来であれば保存治療が行われていた歯でも抜歯しインプラント治療を行うことが第一選択とされる傾向にあるように感じる。また、『永続性』という言葉が足かせとなり、治療を行った歯は必ず長期予後が得られないと悪だと思われる風潮があるように思えるが、果たしてそうだろうか。

今回、患者は43歳女性、右下7FMCの舌側マージン部のカリエスによる実質欠損を主訴に来院された。右下7には歯肉縁下カリエス、右下6にはデンタルX線所見にて根管内にパーフォレーションを疑わせる像を認めた。処置を始める前に、歯牙保存する場合の治療のオプションと、最悪な状況では抜歯になる可能性、その後の欠損補綴の治療方針まで患者に十分な説明を行い、歯牙を保存する方向で同意を得て、治療に移行した。マイクロスコープによる拡大診療下にて、パーフォレーションリペアにはMTAセメントを使用し、歯肉縁下カリエスに対してはクラウンレンジングを行い、予知性が低いと診断した歯を保存し、最終補綴を完成することができた。諸先生方には一本の歯を保存するためのご意見、アドバイスを頂ければ幸いです。